

## 『ラスト・オーダー』が聴こえる

佐伯 恵子

1

二駅隣りの歯科医院で治療をすませ、桜堤駅に帰りつくと、晩夏の夕焼空がオレンジ色に染まっていた。駅舎と雑居ビルの間の道の行く手の車が行き交う県道の上空に思ひがけない美しさで広がっている。昌雄と結婚し、この町にもう五十八年も住みついているというのに、こういう駅附近の風景などゆっくりと眺めたことはなかつた。空を仰いだのは久しぶりという気がする。ここに立つて一刻々々の色彩の変化を眺めていたい。

昌雄は、今日は町会のバス一泊旅行に参加して出かけた。若い頃は旅行が趣味の一つであったが、八十五歳となつた今は年に一、二度、日帰り旅行に行くだけとなつた。同年齢の明子は狭心症で二度入院し、その後は足が弱つて旅行にはめつたに行かなくなつてゐる。

明子は、いつものようにその通りを行こうとして、ふと、この間、昌雄について通り抜けてみた駅裏の暗い道を思い出した。その小路とでもいつた小さな道は、つい最近知らぬ間に表通りの商店と商店の間を入り県道に抜けられるようになつていて。昌雄はそういういかがわしいような道が好きだ。「こっちの方が近いよ」と、さつさと歩いて行つてしまつたから、しかたなくついて行つた。真つ暗な所を数メートル歩き駅舎に組みこまれた飲食店が何軒か並んでいる所に出た。片側が自転車置場となつていて数十台が犇めいて置かれている。駅附近的放置自転車がここに移された訳か、と納得した。通りすがりの三軒目か四軒目の店から聴いたことのある曲のメロディが流れてきた。あれは、荒木とよひさの、『ラスト・オーダー』だ、と気がついた。足を止められた。ラジオ深夜便の歌で、この春に聴いた。甘いメロディが耳につく。「ラストオーダー、もう一杯だけさ」、ガラス窓越しに数脚のテーブルが並び、若い男と女が離れた席に一人づつ、ぼつんとかけているのが見えた。昌雄が県道の横断歩道を渡り歩道の向こう端に立つて待つている。明子は足が遅いからいつも置いていかれてしまう。昌雄は明子の歩調に合わせたことがない。自分が無事に横断することで精一杯なのだ。車をやり過ごしていると、今しがた聴いたメロディが、ふいに蘇えつた。ガラス窓から見えた男と女の光景に気を奪われた。あの人たち、相手を待つていたのだろうか。暮れゆくガラス窓の方をじつと見つめて動かなかつた、二人とも。私たち、ああいう風に待ち合わせをしたことがあつただろうか。私にああいう青春があつたのだろうか。信号が変わり向こう側に渡ると、そんなことはすぐに忘れた。今、それを思い出したのだ。明子は、この間のその小路を通して行こうと思いついた。

目が慣れたのか今日はさほど暗そうな、とは思わなかつた。足を踏み出そうとした時、改札口の方から乗降客の一団が流れてきた。

「山根さん」と呼ぶ人がいる。見ると平山俊之であつた。少々季節外れの白いパナマ帽子を洒落た風に被つてゐる。昌雄の社交ダンス仲間だ。昌雄や明子と同年齢だが、ストライプ、ライトグレーのジャケット、背筋の伸びた、きびきびした容姿は遠目に七十歳くらいとしか見えない。

彼とは、老人福祉施設『憩いの家』の仲間と連れ立つて、中国料理のチャーン店に行つ

たことがある。明子は『憩いの家』で短歌会に参加しているから彼を何度も見かけてはいる。

新しい道の入口に立つていると、彼が寄ってきた。

『バーミヤン』で、ご一緒しました

明子が言うと、ちょっと辺りを眺めて、

「今日は、ご主人は」と、訊いた。

「町会のバス旅行に出かけました」

彼は、えつ、とおかしそうな顔になり、

「町会の。えーっ、うちのも行つたんですよ。書道の仲間のメンバーと」

「そう」と明子はなぜともなくおかしくなつて笑つた。

「それで、今日は卓球とかコーラスの帰りですか」

「そう、卓球」

彼は、暗がりの前方の店に目をやつて、

「じやあ、丁度いい。その辺で食べて行きましようか」と、唐突に言つた。氣さくな言い方に釣られ明子はすぐ承諾した。

安直な普請の店が並び、三軒目のラーメン店に入った。夫婦かもしれない中年の男と女が立ち働いている。他には客がいなかつた。明子が、味噌つけ麺、彼がチャーハンを注文した。彼は食べ物など、まるで頓着がない、といった様子で食べている。

「平山さんはダンスの会で一番もてるんですつてね。うちの人が言つていました」

「いや、もつと上手いのがいる。後から入ってきた。上手い、彼は」

きつぱりと言う。この人は潔い人らしい。老人同士がつき合うにはお互いの好みを心得ておかなければならぬと思つてゐる。明子はまた訊いた。

「いつだつたかしら、おととしだつたかな、『憩いの家』の文化祭で歌つた時の歌はすばらしかつたわ。一人だけクラシックの曲で。あれはどうして、どこでおやりになつていたのですか」

「いやあ」

彼は嬉しそうな顔で謙遜の態となつた。

「十年ほど前までオペラの会に入つていて。音大の講師が指導に来てくれていたんですが、第一テノールがいなくなつて解散してしまつたんですよ」

「そうですか。あれはよかつたわ。プロになろうと思つたことがあるのではないかと思つた。こんな人がどうしてこんな所で、つて」

いやあ、いやあ、と彼は照れた。

「菜園とかガーディニングとかは。奥様は」

「うちのは書道一本やり。先生に代わりをやらされてふうふう言つてゐる。今、やめろと言つてゐるところ」

明子は声を立てて笑つた。

あと、ペットのことだけを訊いておこう。ずいぶん親しくなつたつもりでいた友人に、うつかり猫の話をして口を噤まれ、以来敬遠されてしまつたことがある。

「平山さんの所は犬とか猫とかは」

「前に犬がいたけど寿命で死んでしまつた。僕は犬は好きだけど猫はダメだ。猫はすり

寄つて来るでしよう。あのすり寄つてこられるのがどうも  
彼らしい言い草だ。それが可愛いいと思う人もいるのに。凡ての仕草がその生き物の

生きるための知恵なのに。この人、単純な人なのかな。

彼がふいに、おもしろおかしいといった顔になつた。

「僕の姉というのが特別の猫好きだった。若かつた頃は、わざわざ四季野公園の野良猫  
に餌やりに行つていたんだから」

はつとした。四季野公園、餌やり、まさか。

「僕の四つ年上での、自分の子供よりかわいいんだ。猫好きの女性というのは、あれは  
特別だね」

四歳上、まちがいがない。桐子だ。この人の姉が桐子だなんて。

「そのお姉さん、桐子さんて方でしよう」

「えつ、知つてるの、これは驚いた」

平山が頓狂な声を出し目を丸くした。

「ずっと以前、もう昔よね、その公園の餌やりに一緒に行つたわ」

へえっと平山は感心した。六十年以上も前の、平山も二十歳代であつた頃の話が引き  
出されたことに感じ入つてゐるらしい。

## 2

明子は当時、有楽町の駅から歩いて十分のドイツ資本の商社に勤めていた。外語大在  
学中と就職してすぐとの三年の間に相次いで両親を失い、独りとなつていていた時である。  
母は夕刻台所で倒れた。心筋梗塞でその夜のうちに亡くなつた。父は天袋から地図を取  
り出そうとしてベッドの柵を踏み外し転落した。その時ベッドの鋼材の脚で頭を打ち三  
日後に亡くなつた。定年退職の三年前五十二歳の年齢であつた。

ビルの商社のオフィスからは皇居の屋根の一部が見え樹木の緑がいつも黒ずんで見え  
る。堀を隔てて四季野公園がある。オフィスには十数名の社員がいた。社内では英語し  
か使はず、私語を交わすことはできない。日本人の女子社員は六名いたが、その頃はま  
だ親しい人はいなかつた。午後四時の退社の時、更衣室のロッカーフラフから毎日何か荷物を  
入れたトート・バッグを取り出している人がいた。その人は千田桐子という名前で、キ  
リコという名の響きがよく、まつさきに名前を憶えた人だ。ある日ビルの外に出てから  
追いついて訊いた。

「何か、お稽古事に行かれているんですか」

桐子がふりむくと、「あ、これ」という表情でバッグに視線をやり、ほほ笑んだ。明子  
と肩を並べるとゆつくりとした歩調になる。

「これからその辺でショッピングとかすませて、それから公園に行つて猫に食べさせる  
のね。あなたは猫は嫌い」

「いえ、飼つたことはないけど。父の転勤でいつもペットは飼えなかつたから。でもい  
つか落ち着いたら飼いたいと思つていたわ」

「そう、一緒に行つてみる」

「ええ。はい」

いつの日か、外に犬がいて中に猫が一匹いる家に住みたいと思つてゐた。

桐子はちょっとと考えていた。

「今日はホールに寄つてから行くけど、いい」

と訊く。

「ホールって。ああ、どうぞ」

ホールというのは、ダンス・ホールの事らしいと分り冒険に出かけるような気分になつた。社交ダンスは学校でダンスのクラブのメンバーから時々誘われて踊つたことはあるが、街のホールで踊つたことはない。銀座通りから新橋へと歩き、一本裏通りの大きなホールに桐子が入つて行つた。ドアをあけると濃密なムードが醸し出されている。夢中で桐子についていく。更衣室で、桐子はバッグから大きなブローチを取り出し襟元につけた。眩ゆい煌めきがボーキッシュなスタイルのイメージを一変させた。数十組の男女が踊つている。桐子は毎曲、二、三人の男に誘われた。明子も誘われて踊つた。ブルースとタンゴ、ワルツ、ルンバが繰り返される。

明子は桐子にばかり目を奪われた。曲が止み一同が、さあーつかと壁際に引き揚げた時のあの一瞬の静寂、桐子は背中を壁に凭せあの大きな澄んだ目でまつすぐ虚空を見つめていた。少しも笑つてはいない。彫りの深い目鼻立ちの毅然とした容姿が貴婦人のようだ、と思われた。ホールを出て公園に向かう道中、桐子は笑顔で言つた。

「亡くなつた亭主よりました男がいたら結婚してもいいと思つてゐるのに」

二人で千疋屋に寄つてジュースを飲み一息ついてから公園に急いだ。あれは六月の日の長い時であつたからホールに立ち寄せたのだ。だが、その後は一度も誘われなかつた。

あれは、この私のための歓迎会であつたのかもしれないと明子は思つてゐる。

桐子は戦死した夫のことを話してくれた。夫とは学生時代からのつき合いで二学年上、桐子が卒業するのを待つてすぐに結婚したという。小田原の家には両親と義妹一人がいた。昭和十八年の結婚間もなくの時に召集令状が配達されて戦地に行かされた。男の子が生まれ父親の顔を知らずに育つ。夫は南方戦線、東部ニューギニアで戦死した。終戦の翌年三月に戦友であつたという静岡の人が家を探してやつてきてくれた。義父母と桐子がいた。

「極限状態になると人間の尊厳はなくなる。畜生にならなければ生きていかれない。仲間が死ぬと弔うどころか衣類を剥ぎ取り置きざりにして行軍しました。命尽きた死体が次々と捨てられていきました。誰もが茫然として何にも感じなくなるんです。虫という虫は凡て食べました。蛇も蜥蜴も一日がかりで捕まえて食べました。木の芽、葉っぱも。栄養失調だから何でも食べるんです。雨水を貯めて飲んだり。私は生き延びてニューギニアの現地人に助けられ奇跡の生還をした訳です。でもいつも一緒だった千田君は死んでしまつた。息のあるうちにこここの住所を聞きました。奥さんや親にきっと報告に行くからと約束しました。これで報告ができた。よかつた」

戦友は放心の態でしばらく立ち上がりがれないのでいた。

義父は体を硬直させて動かず、義母は畳につつ伏して泣き、桐子は自分の部屋に駆けこみ子供を抱きしめて泣いたといふ。戦友がいつ帰つたのか誰も知らなかつた。「私は働いて子供を育てようと実家に帰つてきたわ。子供の養育を両親に手伝つてもらい今の会社に勤めたのね。千田の家は義妹一人がいて人手が足りている。義妹たちが嫁いで行つてしまつたら戻つてくるからと約束してあるわ。いつだつたか終戦から大分経つた頃に、十一センチ三ミリ四方の桐の箱に入つた金杯と黒塗りの小さいケースに入った桐の花のデザインの勲章が贈られてきたわ。箱を開けてあんた誰、と私言つてやつたの。それがうちの人の代わりだなんて思えない」

桐子は、その話もその時話してくれたきりだ。

「腹を空かせては辛かろうて」と咳きながら、「腹を空かせては辛かろうて」

四季野公園には八ヶ所のエリアに猫が四十匹ほどいる。早朝とか夕刻に自分のお気に入りの猫に餌をやりにくる人もいる。猫たちは気の合った同士で茂みに隠れて暮らす。大方捨てられていった猫だ。その頃はまだキャット・フードなどはなかつた。桐子は小田原の婚家先で懇意にしていた業者に頼んで、築地市場に卸しに行つた帰りに鰯とかアラを置いてもらつていた。それを煮てはきつちりと袋に詰めてくる。キャット・フードが日本で生産されるようになつたのはその後二十年を経た昭和四十年代の後半なのだから。明子は猫たちに馴れて一つのエリアを守つた。桐子が餌を分けてくれる。数匹の猫が蹲り一心に食べているのを眺めると気持が癒される。桐子の夫への思慕を思いやり、それから心の奥にしまつてゐる父母と話している。父と母を思い浮かべるといつも涙が流れた。

暮れ始めると気が急いた。ほら、早く食べてと猫たちに言う。閉園後の人つ氣のなくなつた時刻、荒くれた男たち五、六人が大型犬を連れてきて放す。傍若無人にドカドカとやつてくる。彼等が引き揚げた後、深夜には共同便所の陰に同性愛者の男たちが集まるというのだ。餌やりの仲間たちが話していた。

「お医者とか大学教授が多いらしい」

公園に国鉄労組と日教組、農業、印刷、建築、医療等、各種労組の集会が催されるようになったのはその頃からだ。

四季野公園の思い出は明子の戦後であつた。二十六歳の時、民主活動の講演会で知り合つた昌雄と結婚することとなり退社して桐子にも別れを告げた。桐子は深い眼差しでじっと見詰めて言つた。

「自分を見失わないようね。あなたのエリアはみんなでやるから心配しなくていいわ」桐子とはそれきり会つていない。

### 3

平山のお皿も空になつてゐる。

「さつき隣りの店の看板に珈琲と書いてありました。漢字で珈琲と書かれていると誘われるわ。寄つて行きましょか」  
はあ、そうですか、という顔で頷く。レジで支払いを済ませると先に立つて隣に入つて行つた。

外は藍色に暮れてしまつてゐる。少しく瀟洒な造りの店である。窓辺の小さな円卓に向き合つてかけた。井上陽水の「ジエラシー」の歌が低く流れている。他に二組の客がいた。明子は、まつさきに訊いた。

「お姉さんはお元気なんでしょうか」

「去年亡くなりました、十一月に。あと二ヶ月で一年です」

「そうですか、去年」

桐子が亡くなつた。もう会えない。

「一周忌には僕も行くつもりです。小田原の『だるま』って店でいつもやるんですけどね。姉の所は亡くなつた夫もその父親もそして息子も市役所に勤めましたから丁度その向の『だるま』で役所を眺めながら、つて訳です。あの家の法事にはもう何回も行つた」「息子さんはもうお幾つでしょう」  
「ああ、もう七十に近いのかな。とつくに定年退職して夫婦で孫の世話をやいていますよ」

「お姉さんはずっと小田原にいらしたんですか」

「そう。小田原の千田の家に嫁いだのですが、夫が間もなく戦死したので、子供を連れ

てこつちに帰つてきていたんです。昭和三十二年に千田の義父がくも膜下で倒れ記憶の所がだめになつて、介護が母一人では無理となり戻つて行つたんです。義妹は二人とも嫁いでしまいましたから。僕が二十八歳の時で丁度結婚した時だからよく憶えているんですよ」

すると桐子は明子が結婚した翌年に小田原に引き揚げて行つたのだ。四季野公園の情景が思い出され、もう何十年も経つてしまつたと思った。

平山は何の感傷も感慨もないようであつた。今、現在しかないように見える。

「平山さんは、どういうお仕事をしていらしたんですか」

明子が訊くと、はつとなつて顔を上げた。

「商事会社にいたんです。私の所は六十人ぐらいの支店だからまあ中企業かな、大手ではない」

平山は回顧する風の顔となり急に饒舌になつた。

「いやあ、熾烈な商売だつた。四十年前にコンビニが進出してあれで苦労した。あしたどう転身するか、できりきり舞いでした。同業者間の肚の探り合いが凄まじくて。メーカー招待の一泊旅行とかゴルフ・コンペとかで同業者が顔をつき合わせるわけです。が、この時は向こうの動きを掴かむ。こつちは気取られまいとして緊張の連続でした。今ならネットで情報を得られるかもしれない。僕はその頃課長のポストにいたから逃げられなかつた。ずっと胃潰瘍を患つて、いつも車を走らせる道なら、あつちのどこにトイレがあつて」

あ、失礼、という目で明子に詫び、すぐかまわずに続けた。

「こつちはどこつて、みんな憶えていた。つくづくメーカーはいい。生産者はいい、つて思いましたよ」

平山が顔をピクピクと引きつらせている図が想像される。平山は一息つくと語調が変わつた。

「四十年働いた。それからこうして二十何年か遊ばせてもらつていて。老人は遊ばせてもらつているんです。僕の前の世代の人たちは戦争に刈り出されて命を落としたり空襲で家を焼かれたりした。戦死した夫をいつまでも慕つてゐる姉を見るのは辛かつた。遊びながらこうしていていいのかなと思うことがあります」

平山は笑顔になり、今度はそちらのことを訊きたいというように明子を見た。

「山根さんの所はタイル屋さんだそうで」

「ええ、タイル工事の会社でした。親の代から九十年続いてやつてていたのですが子供が娘一人で嫁いでしまつたから廃業しました。私が嫁いできた時は家族が八人で、以前は農家でしたから敷地も広く家も大きかつたけど貧乏でした。私は明けても暮れても八人のめしたき婆さん、夜ははだし足袋のつぎはぎでした。家族関係のいざこざが絶えない。でも、そのうちに義弟が独立したり義妹が嫁に行つたり義父母が亡くなつたりで今は私たち二人だけになつてしまつました。娘は私の出た学校に入り中学校に勤めて同じ教員と結婚してやつてます。義父母の三十三回忌とか五十回忌をやると、みんなが集まつてきて飲んだり笑つたりします。昔のこと、たいていの事は忘れているんですね。この年になると自分も記憶が薄れて気にならなくなつていて。いつまでも憶えているのは戦争とか災害で亡くなつた人のこと。理不尽な死に方をした人のことは忘れられない。四季野公園で餌をやつていた桐子さんを思い出すことがあります。懐かしくて涙が出ます。私と別れる時、『自分を見失わないようにね』と言つてくれたんですよ」

平山は黙りこんで聞いていた。笑いのない顔になつていて。ふと、『ラスト・オーダー』の曲に変わつた。明子は耳を立てた。この店だつたのだな、と思う。

—ラストオーダー もう一杯だけさ  
しゅうでんも行つたから  
ラストオーダー もう一杯だけさ  
人生は時刻表じゃない—

明子は急に明るくなつた声で言つた。  
「これ、『ラスト・オーダー』、つて歌なんですね。私、この歌を聞くと、私のラスト・  
オーダーは何だろうと考えてしまふ。何十年も忙しい忙しいで終わつてしまつた。あと、  
もう一杯、つて言うのが甘くて刺激的でなにか誘われるわ。私のあともう一杯、つて何  
だろうと思つて」

平山は苦笑した。

「これは飲み屋の歌ですよ。もう一杯飲んで下さいと言つてはいるだけのことですよ」  
えーっ、と明子は大きな声を上げた。次の瞬間、おかしくてならなくなつた。この人  
が桐子の弟だなんて、ああ、おかしい。ほんと、この人らしい。笑いがあとからあとか  
らこみ上げてくる。平山は怪訝な顔で眺めていた。